

「今ってメールとかケータイとかに、たよりきってるっっちゃやん」

語尾がどう考えてもおかしいので笑ってツッコもうとする私を制するように、目の前にいる彼はまったく茶化さず、神妙な顔で話の続きをしたがった。

「だからー、ちょっと試しにやめてみたらどうかなって思うねんけど」
「えっ？ なに？ メールをってことですか？」
「うん。普通のもそやし、何時にどこでって約束するメールもそやし……」

その瞬間、私がおそらくあまりに不安げな顔をしたのだろう、彼はあわてて口をとんがらせ、眉間にシワをよせよせ、ぶるぶると首を横に振った。

「そうじゃなくて。実はな、僕めっちゃいいこと考えてもうてん」

“彼”とはフシギな縁で知り合った。私が公園でひとり本を読んでいて、完全にあちゃらの世界へ行っていた時、突然目の前に現れた、物語の登場人物のイメージまんまの人、それが彼だった。ひとめ見た時から、人を素なモードにさせる脱力系の空気を纏っていて、めがねの奥の細い目は、リラックスした猫のようにゆるい弧を描いている。私は彼に興味を持った。そこから携帯のメールアドレスを交換し、関係は訥々とはじまったのだけど、付き合うというのとはまた違う気もして、今のところの関係は、メル友。それ以上でも以下でもない。会うことはほとんどないし、ふたりとも避けているような感さもある。というのは、実際会っても緊張してしまうから。今もこうしてファミレスにいて、おたがい向かいあっているのだけれど、ほとんど会話らしい会話はなく、彼はテーブルの脇に置いてある「季節のおすすめメニュー」を、何をそんなに、といたくなるほど、ただひたすらにじっと眺めている。さすがに気詰まりになって、そろそろ……と思った時、彼がおもむろに、こんなことを言い出したのだ。

彼の言う「めっちゃいいこと」というのは、こうだ。私は最近自転車通勤していて、毎朝、駅前の大きな歩道橋を渡っている。彼は同じ沿線の、3つ隣の駅の近くに住んでいるのだけど、通勤特急に乗り換えるため、私の最寄り駅でいったん電車を降りて向かいのホームで待つ。歩道橋とホームの高さはほぼ同じで、一番前の乗車位置からだと、50mほど離れたおたがいの姿を確認できる計算になる。それを彼は先日偶然発見したらしく、いわば、これをちゃんと時間を合わせてしようというのだ。で、その時私が赤いバッグを持っていたら、夜の8時に、私たちが住むちょうど間に流れる川のほとりで落ちあおうと。

「気が向いたらでいいねん。僕はいつでもええし」。

どうやら彼は「ちゃんとメールで約束して、会って話す」という順序を経ていく感じがめっぽう苦手なのだろう。分かるような気がした私は、黙ってうなずいた。

彼が私の最寄り駅に着くのは8時36分で、いつもより20分ほど早く家を出ることになるけれど、それでも私は時間を合わせ、せっせこ自転車を走らせる。そして歩道橋の上に着くと、いつかライブで買ったオペラグラスで、彼の姿を探することに専念する。普通電車がゆっくり駅にすべりこむと、たいてい彼は車内で窓にへばりつくようにいて、ドアが開くやいなや小走りで向かいのホームの最前列に並び、こっちを向いて目を凝らす。すると細い目がいっそう細まり、さもいとおしいものを見るような表情になる。私はその顔が最高に好みで、好みすぎて目をそらしてしまう。しばらくしてもう一度見ても、まだ同じ顔をしている。やがて通勤特急が入ってくると同時に、姿はまったく見えなくなる。その間、1分ほど。これが私の毎朝の日課になった。

会う機会もとたんに増えた。日々、家を出る時に迷うのだけど、あまりに頻繁なものなんだと、だいたい週に1〜2回、赤いトートバッグを持っていく。川のほとりにある決められたベンチで、私たちは落ち合うのだけれど、いつも偶然のような気がして、いるとそのたび驚いてしまう。また並んで座っていても、フシギと緊張しない。気が向けば話すけど、話さなくてもぜんぜん「間」が気にならない。少しくらい遅れたって、どっちもちっとも何とも思わないし、二言三言交わして10分ほどで、彼が「じゃ、また」なんてひょうひょうとした口ぶりで、とっとと帰ってしまった時も、別にアリのような気がして、そのまましばらくいたりした。

朝も夜も。言ってしまうえば「会う」というより、駅やビルや木々や川や橋と同じようにそこにある「おたがいの存在を確認する」という感覚に近い。そしてそれはとても自然で、当たり前のごとのような気がするのだ。

夜のとばりがストンとおりて、急に暗く寒くなってきたある日のこと。いつものように川のほとりのベンチで、私は彼に冷え性持ちだという話をした。すると彼は、サンインコウというツボがいいと教えてくれた。どこ？ と聞くと、彼はおもむろに私の前にしゃがみこみ、くるぶしの少し上のふくらはぎをさぐるように触り、ぶにぶにと押した。すると私は自分でも何を思ったか、突如彼の背中にぎゅうっと覆いかぶさった。それは、はたからみると抱きしめるというより、むしろ新種の柔軟体操でもしているふうに見えていたことだろう。彼は一瞬、びっくりと背中がこわばったものの、またすぐもとに戻り、ひたすら私のサンインコウをぶにぶにと押し続ける。ふくらはぎから背中から、イタギモチよさとあたたかさとともに、愛がとめどなくあふれ、流れていく。

こんな奇妙な状況ですら、ここでなら、とてもとても自然なごとのような気がするのだ。

やまむらみつはる

1970年生まれ。BOOKLUCK主宰。ペーパーメディアの企画・編集・執筆に携わる。旅のささやかで美しい瞬間を写真と文章で切り取ったリトルプレス『Beautiful Moments』を自身の出版レーベルBOOKLUCK PUBLISHING roomよりリリース。
www.bookluck.jp

つきやまいくよ

1991年より絵画の個展活動を開始。歌やボエムのパフォーマンスなどでも活動中。9月にはドイツ・ベルリンで本のグループ展に参加。
www.create-berlin.de
ありそうでなかった作家の作品がいっぱいの携帯サイト「petit maison」に作品を掲載中。
www.petit-maison.net (10月中旬オープン予定)

